

亥三月廿五日付京状之写

先日二条様関白御蒙之頃諸家御人数役掛之外無残被差下候様申人も有之候得共
上杉様御屋敷ハ多人数居り候而、太守御帰国後別段罷下候人も無之由儘に見
聞之事

亥十二月廿五日付京状之写

一彦根候此間着旅館要法寺、館林候同断法皇寺、彦根候朋勢^{供カ}三百人計
にて廿三日大坂へ出、鉄炮八拾挺騎馬莫太、館林着之節朋勢千人計、馬廿疋
鉄炮五拾挺位に相見得候よし、廿四日榊原様着朋勢式千人位戦士と見得候
面々ハ自身鎧を持候事

岩崎氏子日記写

肥後彦捕人妻志直家山田十郎之内、十
郎筆記に有之候肥後へ右兩人之本藩なり

外にて申上まいらせ候、寒さに相成候へとも皆御さわりなうめてたくそんしまいらせ候
わしも外記も共に無事にくらしまいらせ候許にて三条様はしめ宰相
様御家中こゝろよく世話にて国許よりもたのもしくそんしまいらせ候、そ(とカ)ふそ
今しはらくかんにんして只々家内むつましくと、こちらもかんし(に)ん致候様
に御頼申候、津和野様よりも時々便御坐候てありかたき事はかりにて
御坐候、菊もまたかへり不申、肥後へとつれたち角平つれてまへり候間、なんきハいたし
申ましく候、肥後轟・山田一寸国境まで帰候間、此手紙ことつけ申候、まつは
あら〜めてたくかしく

筑後水天宮の神主
真木和泉守

亥十月廿九日

筑後水天宮の神主
真木和泉守也 和泉守

母君様
おむつとの
小徳との

五ノ御様方にも宜、其外誰々もよろしく言傳頼申候

愈御無事大慶存候、愚老始外記・劬太郎・中藏ともに無事にて此節
三田尻浅露ニ而佐波山関人内阿白と申所条ケ御辺ニ相成、愚老も密に
御付添、諸公ハ氷上に御移、三田尻ハ諸浪士之兵隊計罷在申候、三津方
大勢参候含之由、只今四人参居申候、

中川君怪道荒早を上に流布之由、不道好機會ニ可有之、老牛出馬も
冬中ニハ必可有之旨御察申候、因州・阿州・備前・藝州・勢州佐々木連名ニ而
上へ宰相卿の無罪を相訟候得共、直々御暇ニ相成候由、ケ様之事却而正議
を激し可申候、中川宮八幡僧双樹院如是ニ被頼、速に

帝位に登り度祈候事相知申候間、右僧ハ因州勝部静男殺申候、
静男ハ愚老知ル人也、此事ハ秘事也、ケ様之事にて長州より外々正人
多有之候、御案心可被下候

愚老三策を尽し候而長公へ差出候、其内荒増可申上候
一家内和睦之事のミ相祈候

少将様ハ因循、御上京無之様頻に奉祈候世子御出馬前にハ津和野へ相頼

【一八頁】

母君様

おむつとの

小徳との

相弥様方にも宜、其外誰々もよろしく言傳頼申候

愈御無事大慶存候、愚老始外記・劬太郎・中藏ともに無事にて此節
三田尻浅露ニ而佐波山関人内阿白と申所条ケ御辺ニ相成、愚老も密に
御付添、諸公ハ氷上に御移、三田尻ハ諸浪士之兵隊計罷在申候、三津方
大勢参候含之由、只今四人参居申候、

中川君怪道荒早を上に流布之由、不道好機會ニ可有之、老牛出馬も
冬中ニハ必可有之旨御察申候、因州・阿州・備前・藝州・勢州佐々木連名ニ而
上へ宰相卿の無罪を相訟候得共、直々御暇ニ相成候由、ケ様之事却而正議
を激し可申候、中川宮八幡僧双樹院如是ニ被頼、速に

帝位に登り度祈候事相知申候間、右僧ハ因州勝部静男殺申候、
静男ハ愚老知ル人也、此事ハ秘事也、ケ様之事にて長州より外々正人
多有之候、御案心可被下候

愚老三策を尽し候而長公へ差出候、其内荒増可申上候

一家内和睦之事のミ相祈候

少将様ハ因循、御上京無之様頻に奉祈候世子御出馬前にハ津和野へ相頼

一書献上仕密ニ申合置候、申入度事如山候へ共、荒々不具

月日

一弥御多幸奉賀上候、愚老無異消光御安意可被下候、三条公
奉始皆様御安泰被為入候、此節ハ九州一致正義之士暮候間、
御出可被下候様奉待候、徳太郎・忠次郎之費も有之候ハ、参度存候、
併道具無之而ハ困入申候

一此度肥後藩轟武兵衛・山田十郎密ニ国境迄帰申候、高瀬邊迄
御案内御頼申度由ニ而御三人之内御諭合等御相談之通、乍御苦勞御
世話可被下候

一東北院・大嶋・田中・下川・酒上等宜御傳聲可被下候、先ハ早々、以上

十月廿九日

和泉守

忠三郎様

舍八様

松三郎様

二白私事三条公ハ勿論長州様方只々御懇命誠に難有仕合御坐候、以上
文して申まいらせ候皆様御さはりなう目出度そんしまいらせ候、私共ミなく
無事にてくらしまいらせ候、御やしきさまより子供さそく御世話に可相成

【一九頁】

一書献上可仕密ニ申合置候、申入度事如山候へ共、荒々不具

月日

一弥御多幸奉賀上候、愚老無異消光御安意可被下候、三条公

奉始皆様御安泰被為入候、此節ハ九州一致正義之士暮候間、

御出可被下候様奉待候、徳太郎・忠次郎之費も有之候ハ、参度存候、
併道具無之而ハ困入申候

一此度肥後藩轟武兵衛・山田十郎密ニ国境迄帰申候、高瀬邊迄

御案内御頼申度由ニ而御三人之内御諭合等御相談之通、乍御苦勞御

世話可被下候

一東北院・大嶋・田中・下川・酒上等宜御傳聲可被下候、先ハ早々、以上

十月廿九日

和泉守

忠三郎様

舍八様

松三郎様

二白私事三条公ハ勿論長州様方只々御懇命誠に難有仕合御坐候、以上
文して申まいらせ候皆様御さはりなう目出度そんしまいらせ候、私共ミなく
無事にてくらしまいらせ候、御やしきさまより子供さそく御世話に可相成

今も付けなくはく申候へり、昔吉ハ亡命候而も宜參候様そんし
引し今もくなくはく申候へり、昔吉ハ亡命候而も宜參候様そんし
しもつ一寸御尋申上候、めてたくかしく

和泉守

猶以外記とわしと一同無事也、御案事下されましく候

子正月廿九日長州御届

旧臘廿四日長門國豊浦郡府中沖合へ異国船壹艘上筋より乗来り
候二付赤間ヶ関炮臺にて相圖両度打揚候得共右無沙汰ニ而夜二入
押而炮臺前向へ乗込候二付 急襲と心得及炮撃候段ハ最初御届
仕候次第第二御坐候、然る所右船同所乗出候後、豊前路沖合へ碇泊中
失火乗組之もの及揚陸且松平修理大夫様御船と申風評も有之候二付
早速飛札を以て問合候内修理大夫様御船来市木治左衛門・土持平八両人
罷越愈修理大夫様御借用船之儀承知仕候、不計儀に付使者を以
及挨拶置候、此段御届申上候様大膳大夫申付越候、以上

二月廿九日

松平大膳大夫内
遠藤太市郎

【二〇頁】

今しはらく宜く御頼ミ申候、曹吉ハ亡命候而も宜參候様そんし
まいらせ候、今ハくらしよく相成候ゆゑ小遣も自由ニ相成申候 よき便りにて
候まゝ一寸御尋申上候、めてたくかしく

十月廿九日

和泉守

ことちさま

おゆきさま

猶以外記とわしと一同無事也、御案事下されましく候

かしく

(九)子正月廿九日長州御届

子正月廿九日長州御届

旧臘廿四日長門國豊浦郡府中沖合へ異国船壹艘上筋より乗来り
候二付赤間ヶ関炮臺にて相圖両度打揚候得共右無沙汰ニ而夜二入
押而炮臺前向へ乗込候二付 急襲と心得及炮撃候段ハ最初御届
仕候次第第二御坐候、然る所右船同所乗出候後、豊前路沖合へ碇泊中
失火乗組之もの及揚陸、且松平修理大夫様御船と申風評も有之候二付
早速飛札を以て問合候内修理大夫様家来市木治左衛門・土持平八両人
罷越愈修理大夫様御借用船之儀承知仕候、不計儀に付使者を以
及挨拶置候、此段御届申上候様大膳大夫申付越候、以上

松平大膳大夫内

遠藤太市郎

正月廿九日

長崎製造鉄所拝借、蒸氣船致修覆長崎へ差越度旧臘廿二日兵庫
致出帆同廿四日夜五ツ時過小倉領田の浦へ致碇泊候所、長府基場より
砲發致候二付、如何様異船にも見違候哉、兼而夜中に八帆柱毎に燈爐
を掛、國印といたし候段、前以致条約置候二付、猶又為念燈爐差出候得共
無体に打掛候二付、早々同領白ノ口 表濱へ引退候所、無程船中致砲發
不殘及燒失乗舟人数之内士官九人機官之もの拾九人行衛相知
不申段申越候、此段御届申上候、以上

正月十日

松平修理大夫内

新納嘉藤治

細川越中守様於御國許被仰渡書写

天朝幕府、御意に依りて天下之致當に帰候様被遊御取扱度儀從來
之由布きしりて取申候事才、公武真之御一和真之御委任に依りて
りしるも為瑞之御混雜其筋より釀来候間、右御基本被為立度御双方
之御本意にて既に御滞京中、公武真之御一和真之御委任に依りて
紛亂致、益切迫の事体に及候而者、弥以右之趣意実地不被為在、御
周旋候而者難相成、依之

【二一頁】

(十) 細川越中守様於御國許被仰渡書写

細川越中守様於御國許被仰渡書写

天朝幕府へ御忠節を被^至尽天下之致當に帰候様被遊御取扱度儀從來
之御本意にて既に御滞京中、公武真之御一和真之御委任に依りて不申
候而者萬端之御混雜此筋より釀来候間、右御基本被為立度御双方へ
被仰立候得共、今以大凡之御政道先^二筋二相成、各國之人心逐日
紛亂致、益切迫の事体に及候而者、弥以右之趣意実地不被為在、御
周旋候而者難相成、依之

天朝さして幕府にてこそ先づ及ぶ能き事なきも先遊市洋論も俄勿論也
時宜次第御登京御出府も被為在

皇國之御為御丹誠を可被為抽と御決心被遊候に付、其趣を以先御隣國
諸侯方へ被仰合、御同心二候ハ、共に御力を被為盡候御覚悟二候事

文久三亥年 同侯御上京前被仰渡候由

英夷より出帆之新聞書近頃横濱へ到来摘要翻譯之大意

日本ハ支那に比すれば遙に増りて勇武の名あり、然りといへども大平久しく
其鋒きく、以敢て信をふる能はざるも、今鹿兒嶋の戦ハ彼の致人
大炮の火門に向ひ断然自若たり、既に砲發の際戦士本に復し、軀を
露し、死を懼れず、能々死を勉たり、嗚呼忠勇実に感すへし、
依而思ふに、斯の如き勇武忠烈の國なれば、數年を待す東方の一強國
とならむ、今鹿兒嶋の役に報せん大兵數万、軍艦數艘を以セ者、必然
勝利を得べきなれ共、如斯廉武の國、一度仇敵となり、憤激勉強
を以持長し、數年ならずとも讎を報せんハ我損ありて益なし、
如斯の國体に以、懇親を結び、相互に救援の志を以富強を計るにしかず、
固有の強國の名実に空しからず云々

【一二頁】

天朝にても幕府にても可然御所置筋無御遠慮被遊御評論候儀勿論二而
時宜次第御登京御出府も被為在

皇國之御為御丹誠を可被為抽と御決心被遊候に付、其趣を以先御隣國
諸侯方へ被仰合、御同心二候ハ、共に御力を被為盡候御覚悟二候事

文久三亥年 同侯御上京前被仰渡候由

(十一) 英夷より出版之新聞書近頃横濱へ到来摘要翻譯之大意

英夷より出帆之新聞書近頃横濱へ到来摘要翻譯之大意

日本ハ支那に比すれば遙に増りて勇武の名あり、然りといへども大平久しく
打續きたれハ、敢て信する事能ハさりしに、鹿兒嶋の戦に彼の致人
大炮の火門に向ひ断然自若たり、既に砲發の際戦士本に復し、軀を
露し、死を懼れず、能々死を勉たり、嗚呼忠勇実に感すへし、
依而思ふに、斯の如き勇武忠烈の國なれば、數年を待す東方の一強國
とならむ、今鹿兒嶋の役に報せん大兵數万、軍艦數艘を以セ者、必然
勝利を得べきなれ共、如斯廉武の國、一度仇敵となり、憤激勉強
を以持長し、數年ならずとも讎を報せんハ我損ありて益なし、
如斯の國体に以、懇親を結び、相互に救援の志を以富強を計るにしかず、
固有の強國の名実に空しからず云々

子正月十日因州侯建白

微臣慶徳去冬奉蒙 勅命候付而ハ速に登京可仕筈ニ候へとも、傳奏迄及言上
候通痛所今ハ在再罷在、迎も旅行仕兼、出京及延引候段恐入奉存候折柄御下向
も無之儀猥に及建言候段其罪不輕候へ共、昨夏上京以來実ニ蒙非常之
恩寵毎々參

朝 御直命をも畏候儀、尚又日夜九重之御儀不堪狂愛區々之愚慮寐食
をも不安尚又申上候、抑去秋以來何となく億兆之心

朝議御動揺揺為在候様奉疑候模様無之共難申、於臣慶徳者
朝議今更御動揺無之御事と奉存候、其訳ハ先達而在京之砌、參

朝之度々大臣両卿へも親しく奉伺候所、於攘夷之儀ハ
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

有之、引續有栖川宮御下向之 御内意も有之候得共、其外於關東攘夷之談判
取掛り候趣言上ニ相成候ニ付暫時其義も被止候趣、幸ひ老中酒井雅樂頭

王之諸藩憤發不待幕命可及掃攘との
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

有之、引續有栖川宮御下向之 御内意も有之候得共、其外於關東攘夷之談判
取掛り候趣言上ニ相成候ニ付暫時其義も被止候趣、幸ひ老中酒井雅樂頭

王之諸藩憤發不待幕命可及掃攘との
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

有之、引續有栖川宮御下向之 御内意も有之候得共、其外於關東攘夷之談判
取掛り候趣言上ニ相成候ニ付暫時其義も被止候趣、幸ひ老中酒井雅樂頭

王之諸藩憤發不待幕命可及掃攘との
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

【二三頁】

(十二)子正月十日因州侯建白

子 正月十日因州侯建白

微臣慶徳去冬奉蒙 勅命候付而ハ速に登京可仕筈ニ候へとも、傳奏迄及言上
候通痛所今ハ在再罷在、迎も旅行仕兼、出京及延引候段恐入奉存候折柄御下向
も無之儀猥に及建言候段其罪不輕候へ共、昨夏上京以來実ニ蒙非常之
恩寵毎々參

朝 御直命をも畏候儀、尚又日夜九重之御儀不堪狂愛區々之愚慮寐食
をも不安尚又申上候、抑去秋以來何となく億兆之心

朝議御動揺揺為在候様奉疑候模様無之共難申、於臣慶徳者
朝議今更御動揺無之御事と奉存候、其訳ハ先達而在京之砌、參

朝之度々大臣両卿へも親しく奉伺候所、於攘夷之儀ハ
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

有之、引續有栖川宮御下向之 御内意も有之候得共、其外於關東攘夷之談判
取掛り候趣言上ニ相成候ニ付暫時其義も被止候趣、幸ひ老中酒井雅樂頭

王之諸藩憤發不待幕命可及掃攘との
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

有之、引續有栖川宮御下向之 御内意も有之候得共、其外於關東攘夷之談判
取掛り候趣言上ニ相成候ニ付暫時其義も被止候趣、幸ひ老中酒井雅樂頭

王之諸藩憤發不待幕命可及掃攘との
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

有之、引續有栖川宮御下向之 御内意も有之候得共、其外於關東攘夷之談判
取掛り候趣言上ニ相成候ニ付暫時其義も被止候趣、幸ひ老中酒井雅樂頭

王之諸藩憤發不待幕命可及掃攘との
勸令も其外其後阿波侍從等詰合之諸藩へ毎々下攘夷之儀尚又御催促御沙汰等も

上之十付るを又上殿重之御沙汰にも相成候外、一橋中納言登京之儀被仰出候節も攘夷談判之模様被為聞召度との御趣意、且又大樹上洛之儀存候に於ても一留主中鎖港談判相弛候而ハ以の外之義と被

思召候二付可然人体致委任置、攘夷之

慮者必貫徹御沙汰之趣、而此儀之既奉伺し六

殿、而御動搖無之義ハ深く奉畏候、然る所前文之

御動搖被為在候紛々傳聞仕候、是全く実を不知者之妄言と奉存候へ共、万

右等聊にても、朝議御動搖御坐候而ハ自然天下之士民九重之深淺を伺、解

可仕候、既に奉疑者兼疑を生し遂に不信

至尊之聖徳を奉感戴、補相之賢徳に鼓動せられ候儀二御坐候所此節二至り攘夷

変して若開港と相成候様之義も有之候而者、乍恐天下之銳氣是より相撓

候事と深恐入奉存候、是迄多く言上仕候儀改而申上候二も不及候得共、民信

なけれハ不立、一旦攘夷之期限迄布告二相成

加茂・八幡へ、行幸御祈願被為在候程之儀、且攘夷之儀被仰出候以來

水火二入り白刃を踏み其為殞命者幾千万人二及候歟、さすれハ萬一

叡慮御動搖二相成候ハ、神怒り鬼怨ミ随而間閔流離候者も又愠ミ可申

【二四頁】

上京に付而者尚又嚴重之御沙汰二も相成候歟二奉伺候、一橋中納言登京之

儀被仰出候節も攘夷談判之模様被為聞召度との御趣意、且又大樹

上洛被仰出候節も万一留主中鎖港談判相弛候而ハ以の外之義と被

思召候二付可然人体致委任置、攘夷之

叡慮者必貫徹御沙汰之趣も奉伺候へハ

叡慮御動搖無之義ハ深く奉畏候、然る所前文之

御動搖被為在候紛々傳聞仕候、是全く実を不知者之妄言と奉存候へ共、万

右等聊にても、朝議御動搖御坐候而ハ自然天下之士民九重之深淺を伺、解

可仕候、既に奉疑者兼疑を生し遂に不信

至尊之聖徳を奉感戴、補相之賢徳に鼓動せられ候儀二御坐候所此節二至り攘夷

変して若開港と相成候様之義も有之候而者、乍恐天下之銳氣是より相撓

候事と深恐入奉存候、是迄多く言上仕候儀改而申上候二も不及候得共、民信

なけれハ不立、一旦攘夷之期限迄布告二相成

加茂・八幡へ、行幸御祈願被為在候程之儀、且攘夷之儀被仰出候以來

水火二入り白刃を踏み其為殞命者幾千万人二及候歟、さすれハ萬一

叡慮御動搖二相成候ハ、神怒り鬼怨ミ随而間閔流離候者も又愠ミ可申

史も人心合し期ありやせり受すふも一何奉謀夫之
敵も而收敵相成天下之人心一和一致仕候不堪至願候人心一致仕候ハ、武備
不整候共

神列候も不整去も夷賊掃攘之覚悟を極め候ハ、必
不整候共、

海内之人心一致仕候様ニ御所置無之而者不相成候様奉存候、就而ハ
福亂仕候而者忽其間隙に乗して夷奴逞志仕候義者必然に付、先達而も
申上候通、三条家以下之人并長州父子之御所置甚以不容易御大事之儀と
非列之夫も一何奉、御心を被為留度奉存候、三条家以下并長州蒙

勅効候義、其罪可有之候得共、攘夷之
勸慮尊奉苦心仕、既に掃攘をも仕候程の義、若又寛大之御所置ニ不相成候
てハ攘夷之先鋒たる長州すら御嚴罰を蒙るに至、唯因循姑息之優
るに不如と萬人存込、天下之銳氣相撓ミ可申歟、尤家来之者共においてハ
粗暴過激之振舞も有之哉ニも相聞得候へとも、畢竟父子攘夷決心仕候

より領内之人民相化し奮勵決心仕、中にも少年容客氣之輩、間闊流離之徒ニ
至候而ハ粗暴之所行にも相及候義歟と奉存候、勿論其罪可有之候へ共、前文
申上候次第、旁去秋之始末弁疏之為、此頃家老近畿迄差出候へ共、入京堅く
御指留之趣にて進退実極に候趣承及候、右等之御所置に相成候而者

【二五頁】

迎も人心居合候期有御坐間敷奉存候間、何卒攘夷之

勸慮御貫徹ニ相成天下之人心一和一致仕候様不堪至願候人心一致仕候ハ、武備
不整候共、

神州拳而焦土と相成候迄も夷賊掃攘と覚悟を極め候ハ、必
勸慮貫徹候間、尚又 御發揮被遊多年之御宿志被為遂候様仕度、就而ハ
海内之人心一致仕候様ニ御所置無之而者不相成候様奉存候、萬一海内之人心
錯亂仕候而者忽其間隙に乗して夷奴逞志仕候義者必然に付、先達而も
申上候通、三条家以下之人并長州父子之御所置甚以不容易御大事之儀と
奉存候、一旦錯亂仕候而ハ迎も一致之期ニ不可至、実に

神州之大事に付、何卒 御心を被為留度奉存候、三条家以下并長州蒙
勸効候義、其罪可有之候得共、攘夷之

勸慮尊奉苦心仕、既に掃攘をも仕候程の義、若又寛大之御所置ニ不相成候
てハ攘夷之先鋒たる長州すら御嚴罰を蒙るに至、唯因循姑息之優
るに不如と萬人存込、天下之銳氣相撓ミ可申歟、尤家来之者共においてハ
粗暴過激之振舞も有之哉ニも相聞得候へとも、畢竟父子攘夷決心仕候

より領内之人民相化し奮勵決心仕、中にも少年容客氣之輩、間闊流離之徒ニ
至候而ハ粗暴之所行にも相及候義歟と奉存候、勿論其罪可有之候へ共、前文
申上候次第、旁去秋之始末弁疏之為、此頃家老近畿迄差出候へ共、入京堅く
御指留之趣にて進退実極に候趣承及候、右等之御所置に相成候而者

御指留之趣にて進退実極に候趣承及候、右等之御所置に相成候而者

大膳大夫父子ハ恐入候共、領内之人民痛憤難止、少年客氣之輩間閑流離

之徒如何之變動相起候義も難計、自然及紛亂候而ハ御取鎮も中^{タカカ}不容易、

且内地の變動も素より夷賊の待所ニ御坐候へハ求而彼か術中に陥り

神州をして渠か有とならしむる理に當り可申敷と憂慮仕候、乍恐萬一

皇國中内亂起り候而者攘夷之一条如何可相成や、攘夷之儀より事起り却而

攘夷の妨と相成候而已ならず、益 皇威之御衰微と可相成候間、三条以下^{ホタマ}勝

出奔之罪并長州之藩過激の科ハ一應御正し被成候とも何卒攘夷先鋒

之功を以寛大之御所置ニ相成、三条家以下帰京、長州入京被指免候ハ、人心居

合可申敷と奉存候右言上之趣必しも曲而彼等を相救候にてハ毛頭無之候得共、

實に天下安危之機と奉存候ニ付、難然止不顧不肖言上仕候、臣慶徳

前文之次第不幸にして病褥に罷在、上京難仕無摺書取を以奉申上候、

微衷之趣 御採酌可然執奏奉希候、恐惶頓首、謹而呈執事

二月十日 慶徳

昨年七月領内へ英夷渡来之節、早速攘斥不墜 神州之威名家来共にも粉骨碎身

格別ニ尽力之よし被聞召 勸感不斜、依之未上京不致在国中之儀ニ候得共、厚き以

大膳大夫父子ハ恐入候共、領内之人民痛憤難止、少年客氣之輩間閑流離

之徒如何之變動相起候義も難計、自然及紛亂候而ハ御取鎮も中^{タカカ}不容易、

且内地の變動も素より夷賊の待所ニ御坐候へハ求而彼か術中に陥り

神州をして渠か有とならしむる理に當り可申敷と憂慮仕候、乍恐萬一

皇國中内亂起り候而者攘夷之一条如何可相成や、攘夷之儀より事起り却而

攘夷の妨と相成候而已ならず、益 皇威之御衰微と可相成候間、三条以下^{ホタマ}勝

出奔之罪并長州之藩過激の科ハ一應御正し被成候とも何卒攘夷先鋒

之功を以寛大之御所置ニ相成、三条家以下帰京、長州入京被指免候ハ、人心居

合可申敷と奉存候右言上之趣必しも曲而彼等を相救候にてハ毛頭無之候得共、

實に天下安危之機と奉存候ニ付、難然止不顧不肖言上仕候、臣慶徳

正月十日

慶徳

(十三) 島津中将(茂久宛)攘夷実行に付感状

修理大夫事

薩摩少将

昨年七月領内へ英夷渡来之節、早速攘斥不墜 神州之威名家来共にも粉骨碎身

格別尽力之よし被聞召

勸感不斜、依之未上京不致在国中之儀ニ候得共、厚き以

思召市二日三入賜之んく

三月

同人

其方家来共 昨年七月領内へ英夷渡来之節 粉骨碎身早速除攘
歡感不斜 依之判金十枚賜之んく

三月

嶋津三郎

不容易時節ニ付 朝廷參豫可有之被仰出候、依之從四位下左近衛
權少將任叙之んく 宣下候事

嶋津少將

此の七日、薩摩ノ小幡以誇一英夷、依来之節早速攘斥不墜
神州之威名 格別之由ニ付、鞍置馬^{三郎}之賜之んく

三月

宇都宮御届

去月廿九日、英夷ノ礼ノ付、御達^{三郎}ニ兼而上上ニ奉^{三郎}御達^{三郎}ノ内入^{三郎}御達^{三郎}ノ内仕^{三郎}候所

【二七頁】

思召 御馬老正賜之候事

正月

同人

其方家来共 昨年七月領内へ英夷渡来之節 粉骨碎身早速除攘
歡感不斜 依之判金十枚賜之候事

正月

(十四) 嶋津三郎朝廷参与任命に付叙位任官宣下

嶋津三郎

不容易時節ニ付 朝廷參豫可有之被仰出候、依之從四位下左近衛
權少將任叙被為 宣下候事

(十五) 嶋津三郎攘夷実行に付、鞍置馬下賜

三郎事

嶋津少將

昨年七月薩摩国鹿兒嶋へ英夷渡来之節早速攘斥不墜
神州之威名 格別尽力之由被聞 召鞍置御馬老正賜之事

正月

宇都宮御届

去月廿九日伝奏衆より依御達 兼而上京罷在候戸田大和守義參
内仕候所